

コロナ禍が収束し いつもの春が巡り来ることを期待する

「春は名のみ 風の寒さや…」大正時代に作られた「早春賦」の歌詞は、長野県安曇野の春浅い雪解け風景に接して作詞されたという。そして、「今日も昨日も雪の空」というフレーズを、二回重ねて終わる。

冬が終わりにさしかかっていることを察したとき、この歌を誰が何処で作詞したのか、気になっていた。待ちわびる春の到来、という心情を、雪景色の中で描いた背景を知り、雪国の風土を昇華してくれた作詞家に感謝したい。この懐かしい歌を初めて聞いたのは台所から流れる母の歌声であった。記録的寒波の到来があり、水道の氷止めをキッチリと済ませ、電力消費も少なめに設定して、外出を控えて暮らす真冬の生活は、耐え難かった。三年ぶりに、小正月行

事や冬祭りは、いつものように開催され、コロナ禍から抜け出しそうな雰囲気になっている。三月の恒例行事「卒業式」も、マスクを着けられないようにしたい、と政府が言い始めた。

成長の著しい小学生が、マスクをしていない同級生の顔を見て、戸惑いなしに喜べるだろうか。気になる状況が、思い浮かぶ。私には小学二年生の孫がいて、ご飯を食べながら学校での出来事を聞いているが、「黙食は嫌だ」と給食を食べる様子を話した時は、可哀想でならなかった。

この子たちが成長して再会するとしたら、どんな面影を呼び起こしながら会話するのか。人間関係の基層をつくる幼少期に、表情のうかがえない同級生たちと、同じ空間

で同じ空気を吸いながら学校生活を送ったのだ。

ガラスで囲まれたセリオンリストの屋内緑地公園では、ひと足先に紅梅がほころんでいた。

NHKの「ドキュメント72時間」で過去321回放送された中から歴代トップ10を選ばれた視聴者投票で第一位を獲得するほどの注目を集め、秋田港の名物となった自販機のうち、どん販売所には行列が出来上がり、子供たちの無邪気に走り回る姿も見受けられて、動き始める春の気配が漂っていた。

間もなく厳しかった冬は去り、待ちわびた季節に変わる。コロナ禍が収束し、自主性を発揮してマスクの無い、いつもの春が巡り来ることを期待している。